

# 病院空間におけるアートの役割

## —高知大学医学部附属病院におけるアートの活用と教育実践—

吉岡 一洋、土井原崇浩、玉瀬 友美、中村 るい、  
野角 孝一、梶原 彰人、野中陽一郎

(人文社会科学系教育学部門)

松岡 真里 (医療学系看護学部門)

利岡加奈子 (医学部・病院事務部)

## The Role of Art in Hospital space : A Practical Use of the Arts at the Kochi University Medical School and Educational Practice

Kazuhiro Yoshioka, Takahiro Doihara, Yumi Tamase, Rui Nakamura,  
Kouichi Nozumi, Akito Kajiwara, Yoichiro Nonaka

(Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit)

Mari Matsuoka

(Medical Sciences Cluster, Nursing Science Unit)

Kanako Toshioka

(Kochi Medical School Hospital, Kochi University)

### 要 約

本研究は、高知大学においてアートと医学の融合を目指した教育実践を考察するものである。本稿におけるアートの定義は、美術と音楽を包含した意味を持ち、美術活動（創作・表現・展示）と音楽活動（演奏・表現・コンサート）の双方について高知大学医学部附属病院（以下、附属病院と記す）で実践する活動内容を考察する。これらのアート活動に共通する事項は「表現」「鑑賞」ということであり、この2項は医療の現場において、喜びや癒しの感情を創出することができるのではないかと考えている。この効果の検証やホスピタルアートの評価については、美術活動の一貫である展覧会会期中に医療従事者を対象としたアンケートを実施することでエビデンスを得る。展覧会やコンサートの開催に至る実施体制や展覧会ディレクション・準備等についても検討する。旧来、病院空間に絵画や彫刻を展示することはあったが、それは寄贈作品を展示するという例が多く、アートが病院空間・組織のイノベーションに影響するという視点での言及は少ない。そのため日本国内におけるホスピタルアートの先進的な取り組みを調査し、比較研究を行う。

執筆者はそれぞれ専門分野が異なる為、各項については主として執筆したものを記しているが、記名の無い箇所については全員或いは数名で打ち合わせを行い考察したものである。

キーワード：美術、音楽、鑑賞教育、ホスピタルアート

### 1. 事業概要及び研究の目的

本研究は2016年に附属病院において開催した「ドローイング展」を前身とするプロジェクトである。「ドローイング展」とは高知大学教育学部芸術文化コースの学生が、授業（西洋画専門、日本画

応用、デザイン専門)において制作した作品を主として附属病院内に展示し、空間を構成した。「ドローイング展」の開催にあたって、展示場所の確保や展示方法、工事、初期費用等の様々な調整が必要であった。また、病院空間での作品展示については、作品の色合いなども含めて、多々配慮すべき点や反省点が残された。本稿ではそれらの反省を踏まえて、第2弾として開催した「色とかたち展」(2017年8月10日～10月24日)及び「ミニコンサート」(9月7日)について考察する。

「色とかたち展」とは高知大学教育学部附属幼稚園(以下、附属幼稚園と記す)と高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門(以下、教育学部門と記す)が進めている第3期中期計画附属校共同研究「絵具遊び活動に関する実践的研究—学部教員と連携した幼児教育プログラムの開発—」の一環として、その成果を展覧会として発表するものである。

このプロジェクトは2017年度よりスタートしたものであり、当初は附属幼稚園と教育学部門の連携であったが、さらに広域連携し、附属病院との協同を模索した。

ホスピタルアートの実践として、園児ののびのび描いた作品を病院に展示することで、それらの作品は、比較的無彩色の多い病院内を明るい空間に変え、鑑賞者にとって心の癒しに繋がると考えた。学内の連携ではあるが、附属病院、附属幼稚園、教育学部、地域協働学部という4つの部局が連携する例は少なく、学際的なプロジェクトといえる。また、教育学部芸術文化コース4年生と地域協働学部2年生が協同で作品制作の授業支援を行い、展覧会準備も行う学部教育(正課外による教育活動)でもある。

本稿の目的は、園児が描いたアートがホスピタルアートとしてどのような効果をもつのか、展覧会及びミニコンサートの実践報告を記録し、本プロジェクトが継続して実施していく為の提言を行うことである。

## 2. 附属幼稚園での「絵具遊び活動」について

附属幼稚園のアート活動とは対象学年を年少、年中、年長組と全てのクラスで活動内容を変えて実施している。学年ごとの活動のねらいは区々であるが、絵具遊びを通じた表現の喜びを全身で体感できるものになっていた。絵具の混色により、無数に広がる色彩の変化を楽しむことや、偶然にできる形や色の変化を喜ぶことが、教育課程のねらいに合致するものである。幼稚園教育要領に示されているように、幼児の豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするためには、一人ひとりの子どもの「自分なり」の感じ方を認め、それを立脚点とした保育を考えることが重要である。そこには保育者の意図的な働きかけや環境構成が必要であるが、幼児の「表現」の保育指導に関して、幼児が創造的に表現することへの援助が大きな課題とされている。

【表1】附属幼稚園の活動スケジュール

学年	日程	内容
年長(5歳児)	2017年6月13日	指を使って絵を描こう、巨大な絵に色を塗ろう
年中(4歳児)	2017年6月20日	ぼたぼた絵を描こう
年少(3歳児)	2017年6月27日	指や手のひらで好きなものを描いてみよう！(フィンガーペインティング)

## 3. 展覧会「色とかたち展」の実践報告

附属幼稚園での「絵具遊び活動」において制作された作品の中で、附属病院での展覧会用に選抜を行った。選抜を行う理由として、作品の鑑賞者が附属病院の患者さんとそのご家族、職員が中心となるため、鑑賞者の心の癒しに繋がる展示を目的とするからである。そのため特に色彩を重視し、

血液を想像させるようなものや、全体的に暗めの作品は展示を見送った。その結果、展示する作品は160×270cm（160×90cmのパネルを3枚）の大きさが1点、10号の大きさが31点、計32点を展示することとした。当初は10号を20点展示する想定であったため、急遽追加で準備を行った。展示に向けたスケジュールについては【表2】にまとめた。10号の作品はパネルに水張りによって固定した。その際、絵具が厚く塗られた箇所は絵具と支持体である紙の収縮率が異なるため、亀裂や剥落が見られた。そこでフィキサチフやドーサ液を散布することによって、展示に耐え得る状態とした。最後に作品を張り込んだパネルを箱額に額装した。パネルに張り込むことで、画面でパネル全体を覆い、パネルの表面と側面にも絵が描かれているのが分かる状態となる。それを箱額に入れることによって、より作品の広がりを感じられるようにした。（野角・土井原）

【表2】 展覧会へ向けたスケジュール

日 程	内 容
2017年5月22日・29日	160×90cmのパネルを3枚、10号パネルを20枚作成し、それぞれ下張りを施す。後日10号パネルを11枚追加。
2017年6月1日	160×90cmのパネルに和紙を水張り
2017年6月5日	160×90cmのパネルを補強
2017年7月14日	20枚の10号パネルの水張り
2017年7月24日・28日	額装
2017年7月28日	展示計画の立案・キャプション制作
2017年8月9日	附属病院での展示作業

#### 4. 附属病院小児科病棟、プレイルームでのミニコンサートを開催して

当日は入院患者の子どもたちとご家族、病院スタッフ、実習生、看護科の学生など、プレイルームに入りきらないほどの聴衆に恵まれた。想定より年齢層の幅が広く、楽器紹介や曲目解説の難易度の設定が難しかったが、こちらの投げかけに対して想像以上の反応が返ってくるなど、演奏者側からの一方的な展開にならず、また演奏者と聴衆との物理的距離が近かったこともあり、時間と空間の一体感、共有感が生まれた。特に印象的であったのは、F.ショパン作曲「ノクターン No.2」である。邦題で「夜想曲」と名付けられたこの曲を、ショパンがどのような夜を想ったのか想像しながら聴いてもらうために目を閉じて聴く、という工夫を加えた。ある人は音楽に合わせて体をゆらし、ある人は穏やかな表情を浮かべながら、またある人は目を開けていたがピアニストの動きをとらえるように見つめ、さっきまでにぎやかだった空間が文字通り【静か】になったのである。楽曲終了時には、感嘆のため息とともに大きな拍手に包まれた。曲の題名や、奏でられた音楽によって聴衆がどのような想像をしたか、それらが年齢や職種、立場によってどのような違いがあるのか、ホスピタルアートの音楽的側面から今後具体的に検討したい課題の一つである。また、アンコールの「テキーラ」では予め用意しておいたエッグ・シェイカーを配布し、リズム遊びや掛け声の練習を行い、演奏に入った。聴衆に楽器を配布しともに演奏することで、演奏者と聴衆の垣根を超え、日常空間であるプレイルームが非日常の音楽体験の場となった。

音楽の醍醐味は、演奏者と聴衆が相互作用しあい、非日常の時間、空間を共有することにある。コンサートは大好評で、「演奏会の質の高さに驚いた」「音楽の力をおもいした」などの感想を得た。今回のコンサートがきっかけで、小児科病棟では「音楽の日（仮）」を設定して、プレイルームで定期的に音楽を聴く機会を作る動きも出てきているようだ。これは、まさに「音楽の力」が、ホ

スピタルアートとして病院スタッフや患者の心の力になるという確証を得るための大きな、そして大切な一歩であろう。(梶原)

## 5. ホスピタルアートの比較研究

昨年から開始したホスピタルアート研究に美術理論の立場で参加することになり、今年度は、病院空間にふさわしいアートを考える一助として、先進的な取り組みを行っている香川県の「四国こどもとおとなの医療センター」及び丸亀市猪熊弦一郎現代美術館を、2017年8月31日、医学部看護学科の教員と学生、施設管理室と医事課の職員及び教育学部の教員と学生の計8名で視察した。

「四国こどもとおとなの医療センター」は、無機質な病院空間に、さわやかな色彩があり、総合受付の空間には、大地に根をおろしたような樹木のオブジェが設置されていた。「アートを病院に」という発想で、院長がアートディレクターの森合音氏に依頼して設計された装置の一つだという。1時間に一度、上部に設置された小さな時計が音楽を奏でながら周りを移動する。すぐ横に待合の椅子が並んでおり、外来の患者は、緊張をほだき、時間を過ごすことができる。

今回の視察は、「四国こどもとおとなの医療センター」の森氏が、ホスピタルアートで実践している概要をお話くださり、その後、病院内を実際に見学した。アートと一口にいっても幅広いが、有名作家の絵を飾るのではなく、「参加型のアート」を目指しているという。たとえば、医療スタッフと患者の手で切り抜いた和紙を漉き込んだランプシェードが置かれ、また各階ごとに壁の色を選択し、説明のための「記号(サイン)」を見やすくするなど、さまざまな工夫があった。森氏によると病院にアートを導入するとは、「創造的な問題解決の場を作ること」だという。

医療現場は、検査データなど、論理的な側面が強調されるが、「四国こどもとおとなの医療センター」は、アートを介して、論理性だけではこぼれ落ちてしまう人間のコミュニケーションを大切にする場となっていた。今後、高知大学医学部附属病院で、ホスピタルアートの実践を行う上で大いに参考にしたい、アートへの姿勢である。(中村)



(写真1)「四国こどもとおとなの医療センター」  
総合受付の空間 (2017年8月31日)

## 6. 病院組織のイノベーション

病院は経営の観点では組織としてイノベーションが必要であるが、効率や機能を追求した分業モデルとなっていることが多く、職種や部署において閉鎖的な集団となる可能性が高い。日常業務を効率的に行いつつ継続的にイノベーション(知識創造活動)が起こる仕組みを作ることが求められる。

知識社会経済やネットワーク技術による職場の経営環境の変化から、部署間の壁を取り除いて人の交流を促す企業が増えている。妹尾によると、共通の体験がベースにありながら異なった知識を持つ者同士が対話をすることで新たな価値が生まれやすくなるという。言葉で表すことが難しい身体的な知識であるノウハウなどの暗黙知を、言葉や文章で表現できる社会的で客観的な形式知に変換し、さらに形式知を暗黙知に変換することを繰り返すことで知識創造が促される。知識創造のプ

ロセスが起こるのが「場」であり、「場」とは場所や空間とは異なり、人と人の関係性を表すものであるとされる。(註1) 紺野は本質的対話、内省的思考のできる「場」の因子と知識創造活動の相関が高いという調査結果を報告している。(註2)

ホスピタルアートのアートマネジメント全体を「場」と捉えると、例えば小児科病棟処置室のホスピタルアートのプロジェクトでは、附属病院と看護学科の連携でイノベーションが起きている。ホスピタルアートの「場」の活用が、病院において継続的にイノベーションを図る方策の一つとなると言えるだろう。(利岡)

病院は、将来、医療者を目指す医学生や看護学生が、臨地実習を通して、学習する「場」としても活用される。その中で看護学生は、実習で受け持つこととなる看護の対象となる方にとって、病院という環境がどのように映っているのかを考える機会が多い。特に子どもを対象とする小児看護領域では、病院環境に関する考察をする機会が多い。そのため、実習体験を通して、学生は、病気や障がいがあり、入院が余儀なくされたとしても、少しでも子ども一人一人の成長発達が保たれ、安心感を得られる環境調整について学習を深めることとなる。しかし、これまでの実習では、学生が子どもと接する中で、子どもにとって楽しみや安心、好奇心を高められるような病院環境について、思考することに留まっていた。そこで、今回、ホスピタルアートの取り組みにおいて、病院環境に興味関心を抱く学生が、実習で深めた思考を実際のアイデアとして他部門の専門職と協議し、計画実施することへと発展した。この取り組みは、現在、大学教育の中で求められる“発信力”“実行力”“計画力”など『社会人基礎力』(註3)を養う場となり、正課学習だけでは体験し得ないより実践的な学習の場となった。すなわち、ホスピタルアートの「場」の活用は、病院組織のみならず、そこで医療を学ぶ学生の学習環境、ひいては、大学教育の変革をもたらす可能性を秘めていると考える。(松岡)

## 7. アンケート調査結果について

ホスピタルアートは、日本でも多くの病院で実践されている。しかし、ホスピタルアートの実践研究においては、評価を行う必要性、評価内容が最初の段階から実践の構造に取り組みされていることが最も効果的であると指摘されている(註4)。先行研究では、病院に展示されたホスピタルアートに対する患者の鑑賞行動や印象評定、ニーズといった様々な観点について調査やインタビューに基づく評価がなされてきた。こうした患者側の視点に立脚した研究知見は、蓄積されつつあるが、ホスピタルアートの実践を病院の中で医療従事者と協同し、新たな病院のあり方の1つとして継続的な活動として発展させていくためには、医療従事者側による評価や医療従事者に及ぼす効果検証も必要不可欠となるだろう。そこで、本研究では、美術活動の計画段階よりエビデンスを得ることを念頭に置き、展覧会「色とかたち展」を実施することに併せて、附属病院内の医療従者を対象にアンケート調査(註5)を実施した。

アンケート調査の手続きは、医学部・病院事務部部門を窓口とし、総務企画課の確認後、検査部及び会計課等部署ごとに当該アンケートを2017年8月10日から8月18日の間に配布し、2017年8月30日あるいは8月31日を期日に回収を行った。回収されたアンケートを集計した結果、調査協力者の総数は、268名(男性64名(23.9%)、女性203名(75.7%)、不明1名(0.4%))であった。調査協力者の属性は、医師28名(10.4%)、看護師・助産師74名(27.6%)、メディカルスタッフ89名(33.2%)、事務職72名(26.9%)、医学部学生0名(0.0%)、不明5名(1.9%)であった。

「色とかたち展」の印象については、吉岡・土井原・野角・中村・柴・利岡(2017)のアンケート調査で活用した同一のイメージ9項目からあてはまるもの全てを選択する多肢選択法により回答を求めた(註6)。回答結果を【表3】に整理し、 $X^2$ 検定を行い( $X^2(8)=283.95$ 、 $p<.01$ )、有意な偏

りがみられたため、残差分析を行った。

【表3】「色とかたち展」の印象評定結果

イメージ項目	あてはまらない		あてはまる	
	度数	頻度(%)	度数	頻度(%)
癒される	181▽	67.54	87▲	32.46
華やぐ	194▽	72.39	74▲	27.61
和む	143▽	53.36	125▲	46.64
なぐさめられる	262▲	97.76	6▽	2.24
安らぐ	215	80.22	53	19.78
勇気づけられる	255▲	95.15	13▽	4.85
ほっとする	226	84.33	42	15.67
目・心の保養になる	200▽	74.63	68▲	25.37
異空間にいるような気持ちになる	251▲	93.66	17▽	6.34

▲は残差分析の結果、有意に大きいもの、▽は有意に小さいもの ( $p<.05$ )。

その結果、あてはまると回答した枠組みの中では、「和む」「癒される」「華やぐ」「目・心の保養になる」といったイメージ項目が、「なぐさめられる」「勇気づけられる」「異空間にいるような気持ちになる」といったイメージ項目より有意に多かった。加えて、「和む」「癒される」「華やぐ」「目・心の保養になる」といったイメージ項目は、調査協力者の4分の1以上があてはまると考えており、本ホスピタルアートの医療従事者への効果と捉えることができる。

病院内でアート作品を展示する必要性〔以下、必要性〕については、4件法で回答を求めた。その結果、回答に欠損値がみられた2名を除いた266名の必要性に対する平均評定値は、3.14 (SD=0.75)であった。次に調査協力者の属性による必要性の差異を検討するため、属性が不明な5名を除き、【表4】に属性ごとの平均値とSDを整理するとともに分散分析の結果を示した。その結果、属性の効果がみられたため、多重比較 (Ryan法  $p<.05$ ) を行ったところ、医師と看護師・助産師、医師とメディカルスタッフの間に差がみられた。これらのことから、調査協力者の属性が異なったとしても、理論的中央値以上の評定結果であるため、必要性を高く感じている一方、回収できた本サンプルに留意する必要があるものの、医師は看護師・助産師やメディカルスタッフよりも必要性を感じていることが示された。

今後、病院内で美術展が開催されることに対する評価〔以下、評価〕については、4件法で回答を求めた。その結果、回答に欠損値がみられた2名を除いた266名の意識に対する平均評定値は、3.07 (SD=0.84)であった。次に調査協力者の属性による必要性の差異を検討するため、属性が不明な5名を除き、【表5】に属性ごとの平均値とSDを整理するとともに分散分析の結果を示した。その結果、属性の効果はみられなかった。これらのことから、調査協力者および属性が異なったとし

【表4】必要性

属性	平均値	SD	分散分析結果
医師	3.50	0.63	F(3,257)=2.40 $p = .068$ ( $\eta^2 = .027$ )
看護師・助産師	3.10	0.71	
メディカルスタッフ	3.09	0.78	
事務職	3.14	0.75	

【表5】評価

属性	平均値	SD	分散分析結果
医師	3.29	0.88	F(3,257)=0.81 $p = .489$ ( $\eta^2 = .009$ )
看護師・助産師	3.11	0.79	
メディカルスタッフ	3.02	0.84	
事務職	3.03	0.87	

ても、理論的中央値以上の評定結果であるため、高く評価していることが示された。

今後は、ホスピタルアートの実践を長期的に実践していく中で医療従事者側にどのような効果があるのか、加えて真の協同体制を構築するためにはどのような視点が必要なのかを多面的かつ、プログラム評価の枠組みから検討を行い、基礎的知見を蓄積していくことが求められる。(野中)

## 8. まとめ

本稿では、展覧会及び演奏会の実践を網羅的に述べてきたが、幼稚園でのアート活動（計画・準備）、出品作品の選定、作品のハウジング、作品写真撮影、展覧会ポスター及びキャプションの制作、演奏会の企画・練習・リハーサルの実施・まとめ等、これだけ膨大な作業を数名で実施することは容易なことではない。今後の継続的な実施にあたっては、学内にホスピタルアイデンティティを作成し、包括的な委員会或いはワーキンググループを組織して、実施体制を確立していくことが重要である。

園児が即興的に描いた作品を附属病院で展示するという連関がホスピタルアートであるという確証をえることは困難であったが、ひとりでも病院空間でのアートに対して、癒しやくつろぎを感じることができたなら、本実践は成功したといえるだろう。

本稿は、平成29年高知大学教育学部門研究プロジェクト経費《高知県における学力向上研究》及び、平成29年度高知大学学長裁量経費《学内拠点形成支援プログラム》の助成を受けた研究成果の一部である。

## 参考文献

- ・吉岡聖美「ホスピタルアートに対する患者の鑑賞行動と印象の評価：－外来待合と連絡通路における調査」、デザイン学研究、59(3)、P31-38、2012.
- ・吉岡一洋、土井原崇浩、野角孝一、中村るい、柴英里、利岡加奈子「病院空間における美術の役割－高知大学医学部附属病院における美術の活用と作品鑑賞の教育効果の検証－」、高知大学教育実践研究、31、P1-7、2017.
- ・野中郁次郎、勝見明『イノベーションの本質』、日経BP社BizTech、2004.
- ・白石小百合、白石賢、吉岡聖美「ホスピタルアートと病院施設の満足度－飲食コーナーにおけるインテリアに関する調査－」、横浜市立大学論叢社会科学系列、66(3)、P1-22、2015.

## 注

- (註1) 妹尾大「イノベーションはどうすれば生み出せるのか」、PRESIDENT、2.13、P114、2017.
- (註2) 紺野登「知識創造のワークプレイス・デザイン－「ネットワークが職場」時代のイノベーションの場」、日本労働研究雑誌、627、P50-51、2012.
- (註3) 北島洋子、細田泰子、星和美「看護慶大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」、大阪府立大学看護学部紀要、17(1)、P13-23、2011.
- (註4) 森口ゆたか、森本玄、北村英之、糸井利幸「スピタルアート・プロジェクトによる人材育成の展望と課題」、京都造形芸術大学紀要 (Genesis)、18、P146-155、2014.
- (註5) 本アンケート用紙はA4用紙1枚からなり、調査協力者の性別や所属を尋ねる質問項目（選択式）、「色とかたち展」のイメージを尋ねる質問項目（多肢選択法）、病院内でアート作品を展示する必要性（4件法）、今後、病院内で美術展が開催されることに対する評価（4件法）に加えて、複数の設問に対して自由記述による回答を求めた。しかし、本研究では、

研究目的及び紙幅の制限から、「色とかたち展」のイメージを尋ねる質問項目(多肢選択法)、病院内でアート作品を展示する必要性(4件法)、今後、病院内で美術展が開催されることに対する評価(4件法)の3つの枠組みに限定して報告を行っている。

- (註6) 吉岡・土井原・野角・中村・柴・利岡(2017)では、「病院内でアート作品を展示することの必要性」、「今後、病院内で美術展が開催されることについて」の結果に限定して論文中に記載している。しかし、実際のアンケート調査では、「印象を尋ねるイメージ評定9項目」に対して、あてはまるもの全てを選択する多肢選択法により回答を求めている。